

松岩寺は昭和20年の戦災でほとんどの建物と仏具を焼失してしまいました。現在あるものはかろうじて焼け残ったものか、先々代と先代がそろえたものです。その中から、興味深い墨跡（ぼくせき）の一幅を機会をみつけて、紹介していきます。

いっぷく紹介 その6

紹介する墨跡は、伸びやかな中に厳格さが漂う筆づかいもあれば、力強さの中に優しさが漂う筆づかいもあったりと個性豊かです。そこには、筆をとった禅僧の生きかたそのものが現れています。崩し字になっていて読みづらい字も少なくないのですが、一語一句の意味を理解できなくても見ているだけで一服の清涼剤になりはしないでしょうか。

平林禪莊一枝梅 牧牛齋敬山 花押 縦27センチ×幅24センチ

今回、ご紹介する「平林禪莊一枝梅」の染筆は、埼玉県新座市・平林僧堂元師家白水敬山（しろうづげいざん）老師です。敬山老師は、明治三十年福岡県生まれ、昭和十五年平林寺住職就任、昭和五十年に逝去されています。



平林禪時代に平林寺の蔵の中で、半紙に描かれた敬山老師の書きぶりと思われる何枚もの絵を見つけたことがあります。でも、普通のものとは少し違っていました。半紙の黒々とした墨の跡が、朱色の筆で修正されているのです。敬山老師がどなたかにご自分の絵を送って添削していただいた習作にちがいません。でも、誰に絵を習われたのか。何枚もの朱正の中に「ゆき」と書かれたものがありました。「ゆき」とは近代日本画の巨匠・小倉遊亀（おくらゆき 1895～2000）さんのことでしょうか。敬山老師は小倉遊亀さんに絵を習われていたのです。小倉遊亀さんは滋賀県に生

まれた旧姓は溝上。小倉姓になったのは、小倉鐵樹師と結婚したから。鐵樹師は山岡鉄舟の弟子で坐禅をよくし平林寺に入りしていたという。私が道場に入門した頃は敬山老師も鉄樹師も既に亡くなられていましたが、小倉遊亀さんは高齡（九十歳）ではあったけれど、未だ院展に出品している現役画家でした。そんな日本画の巨匠から、手紙をいただいたことがある。もちろん、私個人にはではなくて、道場で私が勤めていた役職宛です。和紙の巻紙に毛筆の流麗な筆致でした。読みすすむうちに悪い企てが、私の脳裏をよぎります。「この手紙。誰にも見せず、個人の宝物にしてしまおう。なにしろ、文化勲章受章画家の自筆手紙だから」なんてウキウキしながら末尾に目をやると「遊亀代」と遠慮気味に書かれている。私のような不心得者がいるのはお見通しで、秘書の方が代筆されたのでしょうか。画家はその後活躍されて、平成十二年七月に百五歳の長寿を全うされる。戒名は「大梅院天地遊亀大姉」。晩年はよく梅の画を描かれたようです。そして、こんな言葉を残されている。「人間は年老いて老醜のみじめさを味あわねばならないが、梅は年老いて美にますます深みを増す」。今回ご紹介した禅僧の梅図には、艶やかな女流画家の呼吸が流れている。と、書いたら叱られるでしょうか。

仏事の服装について考えた

喪服のルール

彼岸法要やお盆のおせがき法要に黒い喪服を着てこられる方は、松岩寺の檀家にはおられないのですが、各家の年忌法要の時には、何回忌であろうとも黒い喪服で来られる方がいます。

喪中に身につけるから喪服です。だから、喪が明けたら、喪服を着る必要はない。というかいつまでも黒々としているのは不粹というもの。そもそも喪とは何なのか。広辞苑で調べるとつぎのような説明がされています。

【人の死後、その親族が一定期間、世を避けて家に籠もり、身を慎むこと。親疎によってその期限に長短がある】ひとことで喪中といっても、いろいろな期間があるというのです。大きく分けて、三年・一年・九か月・五か月・三か月の五種類があるらしい。「あるらしい」と、遠慮気味に書くのは、これは仏教ではなくて、孔子さまの儒教の教えだからです。

それで、五種類の期間の長短は何で決まるかというと、故人との「親疎」によるといいます。親疎とは、親しい人と疎遠な人のこと。そういわれても、抽

象的で判断に困ります。現代人は、具体的に書かれたマニュアルがないと納得しないし行動できないのだから。もともと、明治の初め頃まで、それぞれの親疎によって異なる厳密な喪の法律（服忌礼）があったようです。法律（服忌礼）があつたら窮屈ですが、律なんかで決められたら窮屈ですが、それを守れば「空気がよめない」なんてこともないから、かえって楽かもしれない。でも、今はそんなルールがなくなっているから、「年忌法要はい

つでも喪服を着ていれば安心」なんていう野暮な事になったわけ。そこで、わかりやすくして簡単な基準はないかと、ずうつと考えてきて最近ふと思いつきました。キーワードは「忌引き」です。つまり、学校や勤務先を葬儀だからといって休んでも、休暇にならない関係ならば、喪服を着て年忌法要に出席するのは三年忌まで。葬儀に参列して休暇になってしまふ疎遠な人ならば、喪服を着るのは四十九日まで。

これってわかりやすい基準だと思つたのですが、いかがでしょうか。

編集後記

○右ページの「いっぷく紹介」でご紹介した梅図は、もともとは色紙（しきし）に書かれたものです。厚紙の色紙よりは、表装に仕立てた方が、見栄えもよくなるし、保管しやすいから分厚い色紙のうわがわを剥いで表具したのです。和紙の裏にまで浸透した墨汁は、一枚や二枚けずりとても大丈夫。大丈夫ならば、悪いことを考える者が出てくるのが世の常。数百年も前の名僧のまったく同じ墨跡が数枚でてる場合は、この手の細工がほどこされているとか。

○ところで、「色紙」を「いろがみ」と読んだ女子大生がいました。「いろがみ」に違いないのだが、「しきし」と読む場合もある。マッタークーと思って、通っている大学を尋ねたら、東京の本郷にあるT大だという、うーん○さて、娘が学校で音楽のテストがあるらしく、歌の練習をしている。「春は名のみのー」。「早春賦」です。でも、愚かな我が娘らしく「ハルワナノミ」でなく「ハルハナノミ」と歌っている。音符に添えられた歌詞がすべて平仮名だから間違えたのでしょうか。「ハ」でなく「ワ」だと言うと、クラス全員が「ハ」と歌っているとのこと。有名な歌なのになあー○愚かな娘のことを笑っていられない。愚かな父は、つまり仏僧である私は、「同行二人（どうぎょうふにん）」という大事な仏教用語を（どうぎょうふたり）と読んで先輩からそれとなく教えられたことがあります。人生のためになる仏教の話はできないけれど、こうした恥ずかしい経験談はいくらでもご紹介できるのですが、紙面の都合で機会を改めて。